原告団

遺族・CO裁判、災害責任追求、特集号

第三十六号

CO患者・武田さんの実態

職場で、憩いのひととき。左から2人目が武田さん。

藤田町村長

武田潮さんは、職場の人気者。「藤田の村長さん」の愛称で、なかまから親しまれている。

藤田といえば町なのに村長さんの愛称は奇妙だが、返ってそこにユーモラスが躍如としていて、それが彼の人間の真価を、いっそう高からしめているゆえんでもあろうか。

彼にかかると、何もかも笑い話のタネになってしまうから不思議で、口ぐせは「だまれ町人」。

とにかく彼のまわりはほほえましい。

心なき自民党政府から、「お前はもう、CO中毒症は治った」として治癒認定を押しつけられ、労災保償を打ち切られたとき（昭和四十三年九月）の診断書にさえ、「瞼・舌・手指しんとん」と記されているように、彼の言葉は、ちょうど酒に酔っているときの人のようで聞きとりにくい。

それに動作もどことなく緩慢で、一見してCO患者の風貌はかくせない。

だが――細面できりりとした目鼻だちに、ありありと被災前の面影をいろ濃く残しており、それがいっそう彼を包みこんでしまった運命の非情さを語りかけてくるのである。

武田さんは、被災前は開発仕繰工だったが、「これでも昔は、どこにいっても女ご連中からもてての俺だった。今は女ごのことは思い出しもせんごつなってしもたから、お前は返って安心じゃろうが」と、妻の紀子さんに対するからかい半分の言葉も、決してじょうだん口ではない。

現に武田さんと、職場も、被災後の病院生活も、終始身一つに生きてきた仲間の藤吉熊人さん（患者・万田作業所）は語る。

「みんな、ほんな話ですよ。昔は職場でもきれ手で、ものわかりも抜群。仕事もバリバリやっとったですよ。酒が好きで、よく飲み屋のノレンをくぐった仲ですが、女どもからも、事実もてもてでした」

心もとなさ

職場とはいってもそれは、三池労組が断固たるたたかいによって労災補償を打ち切られたCO患者たちのために、会社につくらせた、俗に〝造成職場〟の一つ――新港作業所。

大牟田市新港町六番地。三池炭鉱の鉱員社宅がずらり並んだ一帯の、ここは西南端の一隅にあるバラックの建てもの。彼を含め、ここには今四十九人のCO患者が立ち働いている。

金網切り、鉄線切り、ボルトやナットざらえ、大加背バンド手入れ、それにケーブルのジョイントボックスの手入れなどの雑作業。

武田さんの仕事とて変わりはなく、仕事する手もとが何とも心もとなく、見ているこっちがもどかしくて仕方がない。

そんな彼のどこにも、「きかん気の親父からきたえられて柔道もとった」「子どものころからケンカ大将で、ひけは取らなかった」「太平洋戦争のときは、海軍航空兵だった」などという、若いころの面影を見出すことはできない。

彼の今の賃金、月にほぼ総稼ぎで九万円。手取りは八万円に過ぎぬ。

もの忘れ

武田さんの住まいは、大牟田市藤田町六百七十三番地。

彼は大正十四年一月八日の生れだから、今年四十九歳。

昭和二十八年の三月二十八日、昭和七年五月十日生れの紀子さんと結婚。武田さんが二十八、紀子さんが二十一のときだった。

或る日たずねた折のこと、自分たちの結婚した日の思い出をすらすらとこたえる妻の紀子さんを、しげしげと見つめていた武田さん――

「お前は、ようおぼえとるね」と、目をパチクリすると、紀子さんは「何ばいうね」、といわんばかりの剣幕ではじき返した。

「おぼえとるくさい。三日間も高島田の髪は結いっぱなし。今は、さっさと新婚旅行にいってしまいなはるばってん、あのときのつらかったこと。朝方まで酒の飲みどおし。二度と結婚なんかするもんじゃなかと、つくづく思ったつよ」

やっぱり彼にも、CO患者が共通してもっているもの忘れがあったのである。事実また調べて見たら、政府が彼に治癒認定・労災補償打ち切りをつきつけてきた際の前記の診断書の中にもちゃんとこう記されていた――「物忘れ」「前日の天候を忘れる」「テレビのストーリーを忘れる」「暗算不能」など……。

それでも男の意地あり

中毒症が飲ませるのか、どうにもやまぬ酒

妻は、百姓仕事の重荷を負って

やがて銀婚

二人の間に子どもは三人。

長女由美子さん（二十歳）が高校卒業後、名吉屋で会社勤め。

次女奈保子さん（十八才）が、久留米の一病院の看護婦。

長男政英君（十四歳）は、好きな野球をやめ、今工専進学をめざして猛勉強中。

なるほど、三人の子どものうち二人はすでにそれぞれ身をたてているものの、一人はまさにこれから。彼が月づき家にもち帰る手取り八万円ほどの賃金で、一家の生計が維持されてゆくはずがない。まして私たちが同家をたずねた日開口一番、妻の紀子さんがいった言葉がある。

「こんどきなはるときには、うんというてやろうとかまえとったつですよ。聞いて下さい。六月半ばごろから病院（三井天領病院）に入院して、この九月の半ばに退院したばかりですよ。しかも、肝臓が悪いというのに、毎日酒ばかり飲んで帰ってくるとですから。三カ月の入院中というものは、点滴のしつづけだったことも忘れてしまって、もう、入院もこんどで三回。たとえ不満足なものでも、手取りで八万円の給料がもらえるのは、生まれて初めてのことですよ。ちっとは、わが命を考えてもらいたかつですたい」

もちろん被災前など、一升ひっくり返しても平気だったといわれるほどの酒豪だったが、政府側医師の診断書さえ〝肝疾患〟の項に「肝腫大・硬化著明」と指摘している点を思えば、何はさておき飲酒は禁物。が――、「酒が体に悪いことは、本人の俺が一番よく知っとる。ばってん、CO中毒という病気が飲ますっとじゃろう。会社からの帰り道、どうにも酒屋の前が素通りできん。自転車がとまってしまう」、とこぼす武田さんだ。

「ほんとに、二十五年の銀婚の年もやがて。せめて銀婚旅行くらいは、この人をつれていってやりたかつですたい。。だからいうとですもん」。紀子さんは、祈るようにいうのだが……。

馴れぬ百姓

紀子さんは、熊本市内の一商家から武田さんのもとへ稼してきた人。「百姓なんか見たこともありませんでした」、と彼女はいうが、今は、自宅の近くに集中しているとはいえ、女手一つで二反三畝もの水田を立派に経営している。

苗代造りから始まって、田植え―消毒（夏じゅうつづく）―稲刈り―脱穀―耕転。それに籾すりとつづく、百姓の年仕事。

もちろん稲作の経営は、近くの農家との手間がえですすめてゆくというが、一年間の農作業が終ると、骨を休める暇もなく、こんどは町に仕事を求めて、働きに出てゆく紀子さん。現に、とある現場の湯わかしや掃除の仕事で、賃金一日千四百円を稼いでいる。

「この人には、手伝わされません。それこそ命をもぎとるようもんですし、また今のこの人には何一つやる気もないですから」と、一切の重荷を女の身のか細い肩にかつぐで歩いている。余りにも非情な、運命の転換だった。

誇り忘れず

武田潮さんが被災した箇所は、三川鉱四百五十メートル坑道の入り口だった。

あの一瞬、彼は、あれが爆発だったのか、何なのかわからないというが、「ハッ」と思ったときには、もの凄い火柱が自分に向かって突進してくるのを見た。

が、もうそのときには、彼はしたたかにはね飛ばされていたのである。

直撃だったのだ。

気がついたときには、キャップランプもヘルメットも、何もかもどこかへ吹っ飛ばされてしまい、ただ真っ暗な坑道に横たわっていた。その、自分の体のうえに何ものか、のたりと重くのしかかっていたが、或いは人の死体だったかも知れない、という。

彼はさいわい、爆発から八時間後に救出された。紀子さんに聞けば、そのとき彼の全身は黒血だらけで、見るも無惨な姿だったというから、よほどの力でたたきつけられたものに相違ない。

生きて帰ることができたことがよかったか、それとも悪かったか。とまれ彼に、被災前の人間の骨格は、今はない。

だが、まわりの心なき人びとからは、「あれはバカだ」と口ぐちにそしられることが常だったが、彼は自分の胸のなかで、今も誇りをもって、断固三池の旗を掲げている。

「俺にも男の意地がある。三池労組員のはしくれだ。だから何のかんのといわれると、俺は必ずいってやる。『俺は近藤勇のごたる人間ぞ。損とわかっていたっちゃ歩くべき道を歩く』と」

彼がそういえば、妻の紀子さんも語る――「やっぱり三池労組でたたかってきたからこそ、この人も堂々と生きてこられたつですねですからがんばらなければ。そして、もっと酒の方をひかえてもらって、一日でも長生きしてもらわなければ……」。

一人のCO患者・武田潮さんとその妻紀子さんの生きざまを見ても、三井資本の暴逆をそのまま許しておくことはできぬ。

お願い

原告団といえば、団員は北は千葉から、南は奄美大島まで広がり住んでいるわけです。そんな方のもとにこそ、一日も早く取材におうかがいしたい思いはやまやまですが、実際上できかねる条件がいっぱいです。

どうか遠隔の地にお住まいの原告の皆さん、あの日の思い、今日の実状、これまで歩いてきたイバラの道を、ぜひ書き送ってください。こちらで適宜整理して掲載することにいたします。

皆さん、よろしく。

編集部